

## 畜産講座

### 分娩豚舎の冬場の管理(子豚と母豚の適温は?)

今回、冬場の温度管理について、説明します。冬場、低温ストレスが続くと、子豚は呼吸器疾患（肺炎など）や消化器疾患（下痢など）を引き起こします。このような子豚は発育不良となってしまう、その後の発育の停滞、飼料の無駄遣い、他の疾病を併発・・・と、後々まで、影響します。

冬場のこまめな管理は、手間がかかります。また、こまめに手を加えても、「もうかっている」という実感がわからないかもしれません。しかし、『こまめな温度管理』は確実に収益にとって、プラスになります。病気になってから、治療、対策をするのではなく、病気にならない『先手の管理』のヒントにしてください。

また、新生子牛にも共通する部分もありますので、養豚農家以外の農家の方にもご参考にしていただけると幸いです。

#### ○新生子豚の管理：適温（28～36℃）

子豚は生まれるときに、羊水でぬれた状態で生まれます。この、羊水を乾かすにはエネルギーが必要です。新生子豚は、毛が少なく、皮下脂肪もすくないので、ぬれた状態で長時間いると弱ってしまいます。

冬場、「活力のない子豚が多い」、「哺乳する力が弱い子豚が多い」場合は保温不足を疑う必要があります。これらを予防するためには以下の点にご注意下さい。

- ・ 生まれたらすぐに授乳させる
- ・ 子豚の保温箱の温度は 30℃程度に加温する。[湿度も保つ]

- ・ 無看護分娩では分娩豚舎内は 16℃ 以上

子豚には電機ヒーターなどが用いられます。子牛用もあります。



子豚用ヒーター

子牛用ヒーター

〈パナソニックの HP より〉

生まれた子豚がすぐに、ヒーターのある場所に行ける環境が必要です。低温時期、ヒーターが母豚のおしりから遠いところにあると、生まれた直後の子豚が弱ってしまう場合もあります。分娩予定日が近くなると、ヒーターを母豚の後部（子豚が生まれ落ちそうな所）に吊り下げのようにします。しかし、気温が高いときは母豚が暑がるため、母豚の様子を観察して位置や高さを調節する必要があります。

生まれた子豚はぬれた体表を乾かすために、エネルギーを消耗します。豚舎の温度が低いと、子豚はエネルギーを使い切ってしまう、体温が低下し、動けなくなって死んでしまいます。これを防ぐには、保温に加えて、子豚に早く授乳させエネルギーを補給してあげる必要があります。子豚が生まれたらすぐに授乳できるためには、やはり、温度が必要です。生まれてすぐにエネルギーを蓄えている活力の高い子豚は、動きが活発なので、すぐに母豚の乳に吸い付けるからです。

○ 哺乳子豚の管理：適温（21～27℃）

哺乳している子豚は、寒すぎると母豚にすり寄っていくため、圧死が増えます。また、すぐに水を飲むようになるため、生後すぐに水付けをおこないます。子豚は保温箱内ですごす時間が多く、保温すると冬場は乾燥するので水をほしがります。また、4～7日齢から、餌付用人工乳の給与が始まります。子豚の腸内細菌を人工乳にならすためにも、早めに確実に餌付けすることが必要です。また、子豚のストレスのすくない、1週齢から2週齢程度で去勢を行います。10日齢を過ぎると、子豚の食欲が旺盛になり、母乳だけでは足りなくなるため、人工乳の摂取量が多くなります。この時期に、栄養性の下痢が多くなります。これに、寒冷ストレスが加わると大腸菌性の下痢などに移行するケースが多いので、子豚のお腹を冷やさない飼育方法が大切になります。特に、ストール式の分娩豚舎では子豚のお腹を冷やさない工夫が必要です。ストールの一部にコンパネを敷いて、オガコを撒くのも効果的です。

また、子豚が発育する時期に、人工乳を給与しすぎると、子豚は人工乳を食べるのが楽なので、食べ過ぎてしまいます。最初の内は、一日に2回以上に分けて、給与するようにして下さい。また、人工乳の給与を長時間切らすと、次に給与するときに、子豚は空腹なので食べ過ぎて下痢になってしまいます。こまめに、給餌器をチェックすることが大切です。

それでも、下痢になってしまったら、整腸剤を用いる方法もありますが、思い切って次の段階の人工乳に切り替えてみる方法もあります。子豚の人工乳は日齢が進んだ豚用の物ほどタンパク質含量が低いので、腸内のアルカリ化を防ぎ、下痢が止まることもあります。

## ○ 母豚の温度管理（10～20℃程度）

成豚の適温は約 15℃です。

母豚の腹を冷やすと、新生子豚の活力低下につながるケースもあります。また、妊娠末期の流産、墜脱、脱肛を誘引することもあります。

母豚の適温は新生子豚に比べて低いので、注意して下さい。母豚と子豚は同じ分娩豚舎で飼育しなければいけません。すなわち、同じ豚舎内で2つの温度ゾーンが必要なのです。

また、新生子豚の適温は 30℃で 10℃以下だと、死亡したり、下痢などの疾病を誘引し、発育不良を起こします。

## ○ 分娩豚舎の防寒対策のポイント

豚舎には最高最低温度計（ホームセンターで 1,000 円程度）を吊って、温度を記録して下さい。最高最低温度計は、その日の最高温度と最低温度が記録される温度計です。夜間には想像以上に低温になっていることもあるのですが、最高最低温時計があれば、このような温度異常も見逃すことが無くなります。

無看護分娩で新生子豚にも、母豚にも悪影響がない温度は 15～18℃程度だと言われています。この場合でも、分娩柵内の保温箱の子豚がいる位置の温度はヒーターであたため 30℃を保って下さい。寒いときは保温箱の上に、発泡スチロール板、コンパネや 0.1mm 厚の農業用ビニールシート（ビニールハウス用）を張って下さい。農業用のビニールシートは端を 4 重以上に折り込んでから、タッカーで留めるのが簡単でおすすめです。窓の周辺は冷えるので、ビニールシートなどで窓の周辺をカバーし、保温対策を行います。また、厳寒期、分娩豚舎に「すきま風」は厳禁です。すきまは、布、発泡スチロール板、木材などで塞いで下さい。

分娩豚舎の温度が下がりすぎる場合は外壁の内側や、天井に 0.1mm 厚の農業用ビニールシートを張ると豚舎内温度は上昇します。

分娩柵の周辺（柵の回りと、柵の上）にシートを張るのも効果的です。分娩柵内には子豚用ヒーターがあり、母豚自体も発熱するので、ビニールシートの内側は暖まります。ビニールシートだけでなく、PP プレートなども張るとさらに効果的です。PP プレートもタッカーで留めることができます。この場合、換気も適度に行わないといけません。

豚舎内では、暖かい空気は天井付近にたまり、冷たい空気は下の方にたまります。つまり、保温しても豚がいるところは寒くなってしまいます。保温してもまだ寒いとき、シートで分娩柵の上を囲うのが困難であれば、首振り扇風機を使って下の方から天井に向けて送風するのも効果的です。豚舎内の暖かい空気が豚のいる位置まで循環するからです。

豚舎が鉄製の場合は、胴縁など安価な木材を針金で鉄柱に固定した後、木材にタッカーでビニールシートを留めます。使用後のビニールシートはきれいに外すと次のシーズンにも再利用できますので、「タッカーの針外し（ステーブルプーラー）」もがあると便利です。

ホームセンターに行くと安くて役立ちそうなものがたくさんあります。いろんな建材をみて、畜舎への使い道を考えるのも楽しみです。

皆さんも、安くて簡単にできる、保温対策を行って下さい。

（生産環境部 前田）

(ご参考までに・・・今回、紹介した資材の近所のホームセンターでの価格)

タッカー (約 900 円)

ステープルプーラー、ステープルリムーバー (約 700 円)

農業用ビニールシート (P0 フィルム) (厚さ 0.1mmX 長さ 100mX 幅 185cm)

15,000 円 ~ 20,000 円程度

発泡スチロール板 (10mm 厚 × 910mm × 1820mm) 290 円

PP プレート (2.5mm 厚 × 900mm × 1800mm) 198 円